

【書評】

沼野充義著『チェーホフ—七分の絶望と三分の希望』
(講談社, 2016年, 384ページ)

宮川 絹代
(札幌大学助教)

Numano, Mitsuyohi, *Chekhov: Seventy percent of Despair and thirty percent of Hope*
(Tokyo: Kodansha, 2016)

MIYAGAWA, Kinuyo
Assistant Lecturer, Sapporo University

『群像』の連載をもとにした本書は、チェーホフを軸に、ロシアの歴史に分け入り、そして現在の世界を問う。ここでは、文学が、歴史的過去を背負った同時代の文化や社会、政治の中にあるだけでなく、現代社会が抱える問題を照らし出し、問い続けていることが、多様な側面から示されている。本書の読者は、チェーホフの文学、その生涯のさまざまなテーマに想いを馳せながら、自らがその同じ世界の中にあることに気づくことになるだろう。

本論の12章はそれぞれ、子供時代から死へと流れていくその生涯を彩るテーマに充てられている。第1章は子供時代に始まるが、そこで浮き彫りになるのは「懲役囚」(21頁)と重なるような閉塞感である。子供時代が明るく幸せなものであるという幻想を剥ぎ取るところから、本書のチェーホフ像が構築されて行く。

続いて第2章と第3章で語られる女性との関係では、作家の冗談好きな側面も明らかにしながら、冷酷なほどの観察眼を持ちつつ、己の真実を露呈しないチェーホフの「仮面」(56頁)に目が向けられる。ここで問われるのは、本書を貫く大きなテーマである現実というものである。著者は、チェーホフの恋愛そのものが、「両義的な解釈を呼び起こすように組み立てられた作品だったのではないか」(76頁)と述べ、「創作のために現実から題材をとっていた」(91頁)という作品と現実との関係に加えて、「作品を基準にして、自分の人生を測る」

(同頁)という関係性を指摘する。こうして、チェーホフの作品におけるリアリズムとともにある、文学作品のような、演劇のような現実が浮かび上がる。現実と虚構が、二つの異なる世界として存在するのではなく、混じり合い、補い合い、一つの世界を織りなしていること、あるいは、現実と作品は、行き来することができる二つの世界であること。そこに着目することで、現実と虚構の境界線を自在に操るチェーホフの捉えがたさの背後に潜む、真実というものの不確かさが見えてくる。この現実と虚構の関係性は、チェーホフのリアリズムの本質を突く問題であろう。

境界の曖昧さは、歴史的、社会的現実との関わりにおいても明らかにされる。例えば、ユダヤ人問題が取り上げられている第4章では、著者は、ロシア史におけるこの問題から、チェーホフの個人的経験、そして作品を検討する。そして、明確な立場が読み取りにくいチェーホフの作品の中に、ユダヤ人のステレオタイプを崩すイメージを探り当て、「民族的偏見の脱構築」(141頁)を見出し、民族間の境界の脆さを明らかにしている。また、「狂気と牢獄」と題された第5章でも、狂気と正常の二項対立に疑問を投げかける作家としてチェーホフが語

られる。さらに、第6章「小さな動物園」では、チェーホフが用いた呼びかけの表現に着目し、そこにトランスジェンダー的な態度が現れていることさえ指摘されている。著者は、チェーホフにとっての動物や、人間を含む動物たちによるこの世界について、「はっきりとしたことがなかなか言えないまま」(194頁)としながらも、あえて、動物に、分類し得ない「個別の生命」(同頁)を読み取ろうとする。この見方も、チェーホフの捉えがたさが、常に二項対立の脱構築、ステレオタイプの否定と結びついてきたことを考えると、説得力を持つと言えるだろう。その他、両義性については、サハリンに関する考察も興味深い(第10章)。サハリンそのものの「曖昧さ、両義性、中間性」(304頁)に目が向けられ、またチェーホフ自身も医師と作家の二面性を持ち、サハリンについて書かれたものも論文と文学作品の両義性を持っていたことが指摘される。

このように、あらゆる対象に対して両義的、中間的な態度を特徴とするチェーホフ像において、注目したいのが、喜劇の問題について論じながら提示されている距離という視点である(第9章)。悲劇的な内容の作品がなぜ喜劇と考えられるのかという難題を、先行研究などを示し、多角的に考察した上で、著者は、一見悲劇的な出来事から距離を置いたら、実はそれが可笑しく見えるのではないかという見解を示している。この論証のためには「一冊別の本を書かなければならない」(269頁)と述べられるが、距離という視点は、これまでに論じられてきた他のテーマとも関わる問題として、チェーホフのリアリズムの問題として、今後の研究の可能性に期待がかかる。なぜならば、リアルとは、距離と深い関わりがあるからである。リアルであるとは、対象そのものであること、あるいは対象そのものと同一化することではなく、対象との距離があった上で、それに近づくときに言えることだからである。歴史や社会を含む対象に対して、チェーホフは独自の距離を保ち、その距離感によって、両義性を孕むリアルを表現することができたと考えられるかもしれない。

そして、終盤、病について取り上げられる第11章で、著者は、チェーホフが見られることを拒んでいたことに注目し、自分自身を対象としても距離を保とうとしていたと論じる。本書において、チェーホフの両義性は、現実と虚構、性、狂気と正常、悲劇と喜劇など、あらゆる境界に疑問を投げかける。境界を越え、対立する世界を行き来し、また対象との距離を保ちうるとき、特定の見方や思想に囚われることなく、自由である。けれども、本書から見えてくるチェーホフの自由には、境界越えの怖さが見え隠れする。チェーホフが己の真実を見ること、見られることに対して感じた恐怖は、越えたくない、越えられたくない境界を越えてしまうことへの恐怖であろう。自分自身さえも対象として捉えるとき、チェーホフは、見えるものが全てではないことを誰よりもよく知っていたはずである。見えるものには、捉え尽くすことのできないものが、ブラックホールのように潜んでいる。他者の目に映る自己のリアルが、自分の目に映らない自己の闇を捉えうる怖さ、自己を含むあらゆる対象において見えない闇がある不安、その闇に不意に足を踏み入れてしまうかもしれない恐怖を、価値の崩壊に伴う自由は内包している。

著者は、最後の第12章で、チェーホフの死について私たちが神話化をしてきたかもしれないと指摘するが、ここまで読み進めて来た読者は、現実と虚構の境界の曖昧さを知っている。見えるもの同様に、言葉もまた全てを語り尽くさず、語られることの間隙からは零れ落ちていくものがある。けれども、同時に、語られることによって、生み出される現実もある。

その中で、本書がその考察を通して示しているのは、真実は不確かであるが、それは近づきうるものであること、すなわちリアルは追求しうるものであるということである。本書で提示された視点はどれも、極めて幅広く、奥深い確かな研究に裏打ちされており、またテキストも丁寧に詳らかに分析されている。例えば、宗教や、革命という政治的テーマについてなど、チェーホフが明確に語らなかったところから、世紀末のオカルト的な雰囲気ロシアと響き交わす部分や、革命という視点によって解き明かす箇所が、精到な分析により炙り出されている(第7章、第8章)。随所に見られるロシア語の深遠な理解が反映された翻訳も、新たな解釈の可能性を切り開く。これまで多くの研究が存在するチェーホフであり、本書で繰り広げられた個々の議論は、専門

家によって今後、様々に取り上げられるに違いなく、チェーホフ研究の進展に結びつくだろう。そして、チェーホフに限らず文学を研究する者の前に、本書は、真摯な研究に基づきながら施される挑戦的な解釈が文学に与える新たな生命、一人の作家に徹底的に向き合うことから見えてくるものの豊かさ、そこから導かれる世界への洞察の奥深さを実証している。語られたことを深く掘り下げ、吟味し、また語られなかった現実を、様々なコンテキストを視野に、巧みにテキストから掬い上げたとき、そこに立ち現れるものに、読者は、文学研究の尽きせぬ可能性を確信せずにはいられない。本書は「七分の絶望と三分の希望」を携えて書かれたというが(3頁)、その希望の光は、確かに文学研究の可能性を照らし出している。